

A君

2021. 8. 18

教員になり、小学校3年生の担任となった。学級の子どもたちは、瞳が輝き、活動的で明るかった。それはいいのだが、すぐに一人だけ違う存在の子がいることに気がついた。A君である。まわりの子どもたちは、A君に対しては接し方が違っていた。それは露骨でわかりやすかった。今からもう30年以上も前のことである。

様子を見ていると、A君に対する評価が定まっているようだった。「A君は～な子」レッテルをはられるという表現が合うかもしれない。だんだんとわかってきたことだが、A君は地域でも有名な子どもようだった。狭いエリアである。人の話や評判というものは、すぐに広まり、いつの間にか、それが真実となる。

見ていると、A君は、まわりの人に相手にしてもらいたくて、余計なことをしてしまう。その結果、さらにわるい状況になる。悪循環である。普段はおとなしいタイプの女の子でさえ、A君には強く出る。限られた人間関係の中で、この状況を打開していくのは容易なことではない。

A君はさびしいのではないかと考えた。あの状況では、きっとお母さんも苦しかったに違いない。だが、あの頃の私では、お母さんの話を聞いてあげるといことはできていなかった。20代の若者である。荷が重すぎるといよりは、その役目を果たせるだけの力量が備わっていなかったのだと思う。頼りない先生ということである。

A君のさびしさは、いったいどこからくるのか。家庭環境、保育所からのいきさつなどが考えられる。要因が明らかになったからと言って終わりではない。そこからどうするかである。だが、A君の場合は「本当にそうなのだろうか」という思いが常に私の中にあった。

若かった私は、理屈がどうのこうのというよりは、A君に正面から接した。たとえ事情があるとはいえ、だめなことはだめと教えた。何を考えていたのかというと、「A君は、少なくとも中学生、あるいは高校生までは、この土地で生きていくことになる。このままでは、あまりにもかわいそうである。せっかくの持ち味やよさも発揮させてもらえない」

2年の間、A君の担任であった。しかし、果たしてA君にとって私は担任だったのだろうか。子どもにとって担任の先生とは、どんな存在なのだろうか。力不足、力及ばずの2年間であった。A君のことは、ずっと心にひっかかっている。数えるともう30年になる。今頃は、40代前半である。どこで、どんな活躍をしているのだろうか。福島にはいるのだろうか。家族はいるのだろうか。

A君の人生における2年間に関わったわけだが、その責任はかなり大きいと自覚している。あの頃の私の使命は、A君を指導することではなく、A君を救うことだったのだと思う。今の私は、先生方に、「指導してください」ではなく「生徒を救ってあげてください」と言っていることがある。意識して言っているわけではないのだが、きっとA君が私にそう言わせているのである。そう思っている。